足した。そのころまた米国では、専門化の進行がすすみ、先端技術と共同医療がよいサービスを大衆に提供し、医師には自己実現の満足を与えた。

一七世紀からはじまった種々の診断技術の開発は、病気の経過に関する重要な洞察を与えてくれた。血液分析が自動化されると検査の増加に拍車がかかり、X線の使用も大幅にふえた。心電計、X線は患者を魅了したのである。そして可能なかぎり科学的な装置を使うように要求したのである。

一九七〇年代には医師にとって診断の主要点はもはや事実をもとに結論を論理的に導き出す知的行為ではなく、どんな検査を指示し、どの専門医に相談するかという管理業務になってしまった。病気をなおすには身体の部分をなおすだけでは不十分で、患者とのコミュニケーションを図ろうとする徹底的な努力によって患者の信頼をつかみ、彼らの求めていることや希望を理解する必要があるのだ。テクノロジーと集中型医療のためにわが国における今日の医療もテクノロジーに支配された人間不在の医療になりつつあることが実感される。聴診器や血圧計やX線の開発の歴史も興味深く読めるが、そのあとに続くテクノロジー支配の医療を医師の手に取り戻すためにはどうすればよいか、考えさせられる本である。

（藤倉　一郎）

〔平凡社・東京都目黒区碑文谷五―一六―一九、電話〇三―五七二一―一二五四、一九九五年発行、A五判、三七四頁、四五〇〇円〕

安井広著『ベルツの生涯―近代医学導入の父―』

一

ベルツという人物への関心は、人には様々なものがあろう。筆者にとって岩波文庫版の『ベルツの日記』への関心は、ベルツが浜松へ往診したという伝聞から患家を捜した事がある程度である。

故安井広氏がベルツ研究に着手していた事は、御自身の話から承知していた。「東海蘭学の会」の結成以来、江馬家文書の整理と書状の翻刻出版という勉強会を通じて、学恩を蒙ったものである。平成七年六月の名古屋での日本医史学会総会で主催者の誘いもあっての好機に、江馬庄次郎、青木一郎、安井広の三氏の業績を調べあげ発表したのは、故人達への謝意を表したものである（『日本医史学雑誌』、41―2、および、配布資料参照）。

このたび本書を紹介するにあたり、安井氏がどのようにベルツに迫ったのか知りたく思ったのは、それが生涯の研究課題であることを聞いており、研究発表もあり（『日本医史学雑誌』、30―2）、校正中の逝去という事が念頭を去らなかったからである。

安井氏が敗戦後、中国から帰国されて、愛知県幡豆郡吉良町上横須賀に開業後、郷土史研究から地域の医史学研究に向い、ベルツの妻のハナの生涯や墓の所在に触発され、東三河

からの、日本近代医学の淵源としてのベルツ研究が、幾度かの資料探索ドイツ行に赴かせたのであろう。

そのベルツ研究の端緒が興味深い。すなわち、ベルツ研究は総合的に多人数で研究すべき課題である、という緒方富雄氏の言を「あとがき」に引用しているが、安井氏はそのような機会到来を待っていない。むしろ「現在自分で成し得ることを、まずまとめようと考え、手がけることにした」という。

このような学問への情熱から、河清難俟、の地を行き、その機を自ら興すのである。

二

本書目次（後掲）からもわかるが、安井氏がベルツの生涯を「近代医学導入の父」という観点から、日本滞在中に果たした業績や影響を点検していく上で、特に力を入れたのは、「III 内科学著書から」の項であろう。その特色は、それぞれの疾病名についてのベルツの記事を冒頭において、その疾病についての研究史を論述した点にあり、疾病の近代社会史的位置づけを明確にした点にあると思われる。

もとよりこのような読み方は、蒲原宏氏が「序にかえて」でいうように、筆者にとってもまた「文科系の研究者が手をつけることができなかった」分野に相当するから、文科系の評者の関心事の一斑をいうにすぎない。

その点からいうと、これまで親しんできた岩波文庫版の『ベルツの日記』なるものの、戦前戦後の翻訳成立事情が紹介されていて、興味深い。史料性からいうと、トク・ベルツの恣意的編集行為が施されているという事、『日記』の一部分が流転のあげく関東大震災で消滅した事が紹介されている。

以上は戦前の事であるが、戦後になり、時局を憚っての変形部分を復元させ、『日記』第2部の改訂増補があったことを紹介し、その上で安井氏は追加した。「翻訳からもれているが、ここに原文にはのちにベルツが書いたという明治期についての一文がある」（三二一頁）として、明治九年十一月一日以後の記事、要するに、維新期の政情不安定な状況を記した部分を翻訳している。また、岩波文庫版には言及されていない講演記事、「女子教育上の弊害」（三二六頁）という文章が、安井氏の手によって要旨が始めて翻訳されているなど、新しい知見が示されているところは、筆者にとって有り難いものである。

本書の構成

序文、序にかえて、I 明治初期の東京医学校、II 来日前の経歴と日本における生活、III 内科学著書から（病理学総論以下、十項目）、IV 栄養論、V 温泉医学、VI 中央衛生会、VII ドイツ東洋文化研究協会とベルツ、VIII 人類学、IX 在日中の日記、X ドイツにおける晩年、年譜・業績・あとがき

（岩崎　鐵志）

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町、電話〇七五・七五一・一七八一、平成七年刊、全四四四頁、定価一二三六〇円〕